

氏 名	郷 式 徹
学位の種類	博士 (教育学)
学位記番号	教 博 第 35 号
学位授与の日付	平成 15 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育方法学専攻
学位論文題目	幼児期の自己の心の理解に関する発達心理学的研究

論文調査委員 (主査) 教授 子安増生 教授 吉川左紀子 助教授 遠藤利彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、発達心理学的立場から、3歳～6歳の幼児期における「自己の心の理解」のあり方に注目し、「他者の心の理解」との共通点と相違点を検討するとともに、その発達過程を解明することを試みたものである。本論文は、全部で7章から構成される。

第1章では、本研究で中心的に用いられる「スマーティー課題」(「箱の中身はチョコレート菓子」と思っていた子どもに、箱をあけてみると中身は鉛筆という事実を示した後、次に来る友達がどう思うかをたずねる課題)について紹介・検討した後、「自己の心の理解」には自然発生的で無意識的な知覚・推論過程が含まれる可能性を指摘した。

第2章の実験1では、自己の心的状態の理解(想起)と他者の心的状態の理解(推測)のどちらが先に発達するかを調べるため、スマーティー課題と同型の3課題を3～5歳児63人に実施し、この2つの理解が同時期に起こるとする「理論説(theory theory)」を支持するデータを得た。実験2では、3～4歳児28人に実験1で用いた課題のヴァリエーションを2課題実施し、理論説を支持するデータを得た。ただし、他者の心の理解が表象の理解であるということ自体は支持されたが、幼児が行う表象の操作は完全な命題表象のように抽象的、論理的なものではなく、知覚的要因、既有知識、課題文脈などの影響を受ける可能性が示唆された。

第3章では、自己の心の理解を測定するとされているスマーティー課題について、それが実際には何を測る課題なのかを調べるために、回答方法、被験児の年齢、課題材料の違いなど10の要因を取り上げ、数量化1類による先行研究のメタ分析を行なった。その結果、スマーティー課題の通過によって定義される自己の心の理解に影響する要因として、影響の大きな順に、①被験児の年齢、②投函手続き、③記憶質問で用いられる動詞、④練習試行の有無、の4要因が抽出された。

第4章では、想起する信念がより知覚的なものの場合と、より抽象的なものの場合とを比較することによって、自己の誤った信念の表象的性質を検討した。実験3では、①スマーティー課題、②重さ課題、③イメージ図式課題、④自己能力評価課題、⑤投函課題の5課題を3～6歳児44人に実施した。その結果、年少児、年中児ともに命題的な表象の理解は困難であるが、年中児の場合には、課題への被験児自身の関与が高い場合や、想起すべき誤った信念がより知覚的である場合には、誤った信念の想起が容易になると解釈できるものであった。

第5章では、課題への関与と外在的表象の存在の問題にしばって、それらが自己の誤った信念の想起にどう影響するかを実験的に検証した。実験4として課題への関与と外在的な表象の存在の影響を段階的に操作した課題を3～5歳児53人に実施した。その結果、4歳半未満の子どもは自己の誤った信念を想起することができなかった。他方、4歳半以降には心的状態を表象として扱うメタ表象能力が発現するという結果が得られた。

第6章では、幼稚園の日常生活場面での幼児の発話エピソードをいくつか取り上げて、その発話の背景にある心的表象の操作について解釈を試みた。その結果、年少児は、直前の他者の発話に影響を受けて自らの発話がなされることが多く、発話の背景の心的表象として単一もしくは少数の表象が外的な刺激により次々に書き換えられていくことが示唆された。

第7章では、ここまでの研究結果を踏まえて今後の展望を行い、「モジュール説 (modularity theory)」の立場から、自己及び他者の心的状態の認識に関するメタ表象能力を、進化心理学の観点をも交えて再検討し、実行機能など高次認知機能と関連づけてモデル化していくことの必要性を論じた。

論文審査の結果の要旨

幼児が他者の表象的な心 (representational mind) の理解をどのように発達させるかは、1980年代以降「心の理論」というテーマで研究されてきたが、論者はその研究成果を踏まえて、「自己の心の理解」が幼児期にどのように発達していくかを実証的に調べた。

第1章では、たとえば「箱の中身はチョコレート菓子」と思っていた子どもに、箱をあけて見せて中身は鉛筆であるという事実を示した後、次に来る友達がどう思うかをたずねる「スマーティー」課題を紹介し、それにまつわる問題の論点を整理した。論者がこの「スマーティー」課題と同型のヴァリエーションを次々と考案し、それを幼児に実施して実証的に検証しようとしたところに、本研究の大きな特色を認めることができる。

第2章では、最初に心の理解の発達に関する3つの説について検討が行われた。すなわち、自己理解をもとに他者理解を行うとする「シミュレーション説」、他者理解が自己理解に先行するとする「文化化説」、自己理解と他者理解は同じメタ表象能力を前提とし、並行して発達するという「理論説」について検証するという研究目的が提示された。

第2章の実験1では、スマーティー課題と同型の3課題を3～5歳児63人に実施し、続く実験2では、3～4歳児28人に実験1で用いた課題のヴァリエーションを2課題実施し、ともに理論説を支持するデータを得た。

第3章では、自己の心の理解を測定するとされるスマーティー課題について、それが実際には何を測る課題なのかを調べるために、国内外の14論文82実験の方法と結果を精査し、数量化1類という統計技法を駆使して先行研究のメタ分析を行った。幾種類もの分析が丹念に行われたが、代表的な結果として、①被験児の年齢、②投函手続き、③記憶質問で用いられる動詞、④練習試行の有無の4要因が「自己の心の理解」に影響するものとして抽出され、今後の研究において重要な問題が明らかになった。

第4章の実験3では、①スマーティー課題、②重さ課題、③イメージ図式課題、④自己能力評価課題、⑤投函課題の5課題を設定し、3～6歳児44人に実施した。ここでも数量化3類という統計技法を駆使して課題の分析が行われ、「課題への被験児自身の関与」要因の重要性を示している。

第5章の実験4では、課題への関与と外在的な表象の存在の影響を段階的に操作した課題を3～5歳児53人に実施し、心的状態を表象として扱うメタ表象能力が4歳半以降に発現するという結果を示している。

第6章では、幼稚園の日常生活場面での3年間の参加観察から、幼児の発話エピソードを取り上げ、その発話の背景にある心的表象の操作について論者独自の解釈を試みた。

第7章では、第6章までの研究結果を踏まえて今後の研究の展望を行い、自己および他者の心的状態の認識に関する説明理論である「モジュール説 (modularity theory)」を進化心理学および発達心理学の観点から再検討し、実行機能などの高次認知機能と関連づけてモデル化していくことの必要性を論じて締め括っている。

本論文に対しては、次のような幾つかの問題点ないし不十分な点が指摘できよう。

- (1) 全体を通じて、シミュレーション説、文化化説、理論説のいずれが正しいかを積極的に検証しうる研究パラダイムでは必ずしもないこと。
- (2) 第6章のエピソード分析が、心の理解の問題に焦点づけられているわけではないこと。
- (3) 子どもたちの発達の道筋の多様性について十分考慮した分析と解釈が望まれること。

しかしながら、常に新しい課題を工夫しつつ実証的に論じようとする論者の姿勢は、教育認知心理学の発展にとって重要な知見を生み出しており、高く評価すべきものである。

よって本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年9月1日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。